

我以外皆我師

我以外 皆我師

上記のことばは、作家であり、文化勲章受賞者でもあった吉川英治さんが晩年、好んで色紙にしたためられたことばです。私の恩師からの思いがけな

い贈り物ですが、現在本堂わきの廊下に掲げてあります。ご覧になった方も多かろうと思います。

「我以外は皆我が師」ずっしりと重い、そして味わい深いことばせず。私たちは、ともすると、私が師になりたがり、まわりの者を弟子にしたがりです。自分は他より勝っているといった優越感に浸るのを生きがいと感ずる事から抜け切れません。

吉川さんはご存知のように、親鸞、新平家物語、宮本武蔵等の著作でも有名であり、周囲の方々から常に先生と尊敬された方でありました。しかし、吉川さんは、その人達を逆に師と仰がれたのです。

幼い子の遊びの世界の中から、年老いた老人の一言のことばの中から、無心とか、純粹とか、人生のきびしさとかを感じとられ、それをご自身の糧とされたと推察させていただくことです。

相手を師と仰ぐということは、私がある前に謙虚であり、はからいを持たず、相手を理解することを通して開かれる世界でありましょう。

吉川さんはこの言葉を通して、私たちに、その心を示唆していただいたと、味わいさせていただきました。

私が生きるためには私をとりまく多くの人のお蔭さま、換言すれば「私のために、すべての人が、何らかの形で関わりあい、生かされて生きる私でありました。」と、味わいさせていただくことです。